

平成15年度

玉川図書館近世史料館夏季展示

江戸への道

平成15年6月7日(土)～7月31日(木)

近世史料館 1階展示室



〒920-0863 金沢市玉川町2-20

金沢市立玉川図書館近世史料館

電話 076-221-4750

金沢から江戸に到る下街道

近世期、金沢から江戸に向かう陸路として最短であり、また参勤交代等の利便が高かったコースは、下街道である。金沢から北国街道を津幡、高岡に抜け、魚津、親不知、糸魚川、高田を通過して長野善光寺に至り、さらに軽井沢、碓氷峠を越えて、追分から中山道に合流して江戸に入る約480キロである。

下街道（金沢→高岡→高田→長野→追分→江戸） 約480キロ

上街道東海道経由（金沢→福井→尾張→箱根→江戸）約600キロ

上街道中山道経由（金沢→福井→馬籠→追分→江戸）約660キロ

この代表的な3コースのうち、加賀藩主が実際に参勤交代で通ったのは、約95パーセントが下街道だという。ゆえに加賀藩の参勤交代の道は、ほぼ下街道のことだと思って間違いのないように思われる。

次に参勤交代の所要日数であるが、天候や諸事情によって差はあるものの、12泊13日の行程が平均的である。約480キロを13日間で平均すると、毎日約37キロ程度進むことになる。

江戸幕府が、統制支配のために、諸国大名を江戸に滞在させた制度を参勤交代制という。寛永12年（1635）三代将軍家光のとき制度化され、原則として領国1年江戸1年の生活を反復させるものである。江戸に向かう「参勤」と、他藩大名と入れ代わって「交代」し領国に戻る時期は、原則として4月（今の暦で5月頃）であった。



展 示 品 解 説

各番号前の ☆ は、絵図デジタル化済で、有料で複写可能な資料。

えんぼうねんかんかなざわじょうかず
☆ (1) 延宝年間金沢城下図 190×167cm 1軸

石川県立図書館に所蔵されている5メートル以上の大きな絵図を、大正2年に郷土史家・氏家栄太郎氏が書き写したもの。現代人にも読みやすい文字で書かれている。藩政時代前期にあたる延宝期(1673～1681年)の金沢城下図を、下街道の起点と想定して展示した。近世史料館では、この絵図を映像室の番組「城下図を歩く」の基本図として活用。また近年、デジタル化を行い、玉川図書館ホームページでも公開している。
資料番号 (090-598)

しもどおりやまかわえきろぶんけんのず
☆ (2) 下通山川駅路分間之図 (パンフレット表紙に冒頭部分)

さわだかずのり
宝暦10年(1760) 沢田員矩著 27×683cm 1巻
江戸～金沢の下街道を巻物に描いた江戸時代中期の色彩豊かな絵図。分間之図とは一定の縮尺で描かれた図のこと(この図の場合、1里が1寸5分)。当館所蔵の下街道の絵図としては最も長大である。寺社や旧蹟等を色分け表示し、個々の宿場ごとに距離を表示してある。今回、巻頭から末尾まで広げて展示した。作者は江戸中期の大坂在住の人で地理に精通した人物。
(特 16.78-41)

しもどうちゆうえまき
(3) 下道中絵巻 (折本) 27×11cm 1冊

金沢から江戸までの下街道を描いた下道中の折本。橋など建造物を描き、金沢城や神通川の舟橋、親不知などが強調されている。黄緑色で木々が彩色され、美しい印象を与える。金沢城下付近と、江戸近郊を展示した。
(090-379)



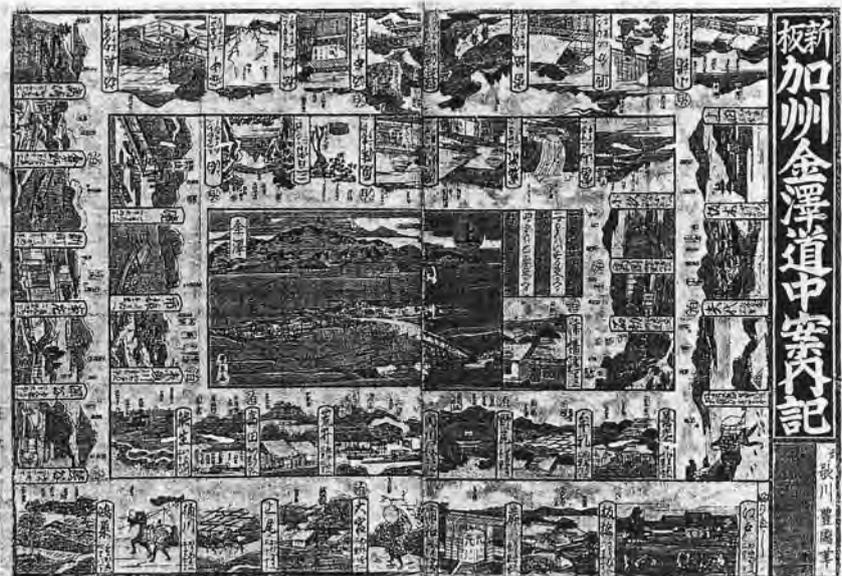


☆ (4) ^{しもどおりやまかわえきろのえず} 下通山川駅路之絵図 ^{ちょうかんず} (鳥瞰図) 21×495cm 1巻

作者や作成年代は不明だが、非常に細密に書かれた鳥瞰図である。鳥瞰図とは鳥が大空から見たような絵図ということだが、橋などの建造物を赤く目立つように描いてある。「駅」とは宿場・宿駅のことで、運送、交通の要所であり、「下通山川駅路之絵図」とは、下街道の山・川・駅・路の図ということ。今回の展示では、一巻の後半部分を展示した。
(090-593)

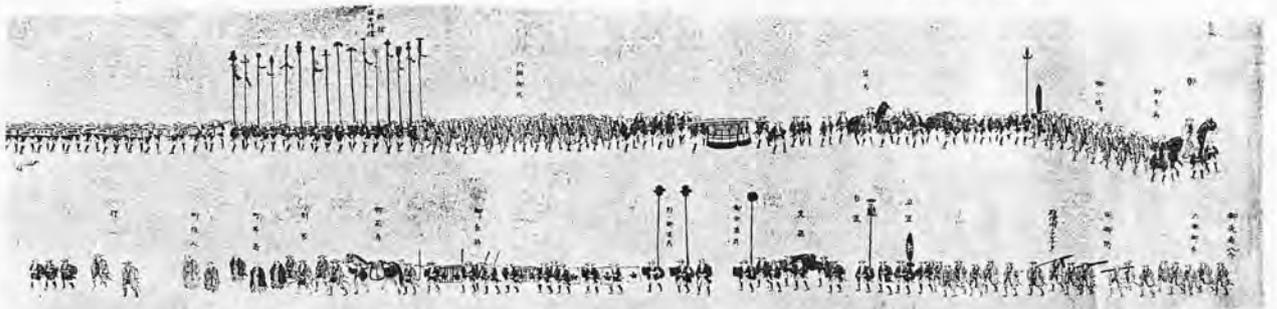
☆ (5) ^{かしゅうかなざわどうちゅうあんないき} 加州金沢道中案内記 ^{しもどうちゅうすごく} (下道中双六) 45×65cm 枚 (袋付)

歌川豊国画の木版。袋表紙は、本郷の加賀藩上屋敷を背に、女性が刀2本を持っている図柄。江戸を振り出しに金沢が終点の双六になっていて、あがり1つ前の「津幡」にてサイコロを振って、1ができれば上がりだが、「一つあまればつばたへかへる」等とある。金沢の橋は、浅野川大橋。
(090-603)

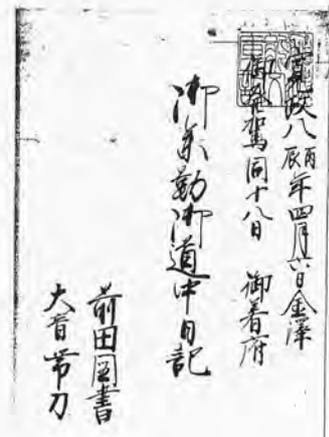


- (6) ^{しんばん}新板金沢道中双六 50×71cm 軸1点
 一寿斎芳員(歌川芳員)画。江戸 和泉屋市兵衛板。幕末頃の印刷。
 日本橋を振り出しに、金沢に到る双六。各宿駅への距離は記されて
 おらず、前の(5)とは違った印象を与える。 (K7-129)

- ☆ (7) ^{だいまりょうぎょうれつえまき}大名行列絵巻(加賀藩・平服) 32×346cm 1軸
 作者および制作年代は不明。記録によれば文政10年(1827)の参勤では、
 藩主直属185人、その陪臣・従者830人、傭夫(ようふ)686人、人足268
 人などを含め、計2019人の編成であったと記録されている。本図は、人
 数の省略を加えながらも編成のとおり、645人が描かれている。巻物を
 広げた場合、左下が先頭で右上が最後尾に該当し、藩主は右端の馬上の
 人物である。 (090-617①)



- (8) ^{ごさんきんごどうちゅうにつき}御参勤御道中日記 24×18cm 67丁 1冊
 寛政8年(1796)、金沢から参勤に随行した
 人持組家老役の前田図書(まえだずしょ)と、
 大音帯刀(おとうたてわき)が記録した自筆の
 道中日記。67丁あるが、冒頭の金沢を出発
 した4月6日の様子を記した部分を展示中。
 この古文書は、全文が用語解説付で翻刻され
 ている。(藩政文書を読む会編『御参勤・御帰国
 御道中日記』) (16.22-74)



- (9) ^{え どころかんず}江戸鳥瞰図 (彩色・木版) 45×58cm 1点
 江戸全域を鳥瞰し富士山まで遠望する、鋏形紹真(1764~1824年 くわがた
 つぐさね) 原画で、多くの建物が描きこまれ、非常に細密な版画である。
 作者は別名・北尾政美(きたおまさよし)等と称し、江戸や美作津山藩松平家
 の御用絵師として活躍。当館には同作者の「大日本絵図」(098.9-47)を
 所蔵しているが、白山などが美しく迫力ある鳥瞰図である。 (大964)

つうこうきってしりょう
(10) 通行切手資料

天保12年(1841)

24×8cm 2点

正式には「越中境通御切手願」。越後の村人が、京都から帰るに際し、(町奉行から特別に申請を許可された)宿屋の主人(北川屋豊右衛門、大浦屋幸右衛門)の名で奉行所に身分保証をして関所の通行切手の発行を依頼する書類。
(090-316)



加賀万歳

(3) 北国下道中

歴代の藩主をはじめ、士民の最も多くの人気を集めてきたのが、この万歳である。内容は、加賀藩が参勤交代で、北陸街道・北国街道・中仙道、そして江戸に至る道中を唄ったものである。前唄と後唄を付け、十二番(十二日)に分けて唄っている。歌詞は、道中の地名・名所、あるいは名物をできるだけかぎり挙げ、それをそっくり掛詞としても用いている。そのあたり憎いというか、まさに巧みそのものである。

この「下道中」は、大夫・才藏二人の舞によるもので、途中の囃しはない。舞いも「式舞」の型を踏むが、式三番叟のように厳格ではない。唄は、あくまでもゆつたりとうたい上げる、代表的な「番物」である。

作者不詳。成立は、越前万歳「五十三次」の影響を受けたものと推測されるので、一応化政期(一八〇四—三〇)以降かと思われる。

なお、この評判が新たに「北国上道中」を生み出し、これは幕末の頃、今の横安江町「近八」(古書店)の先々代が作ったものと伝えられる。

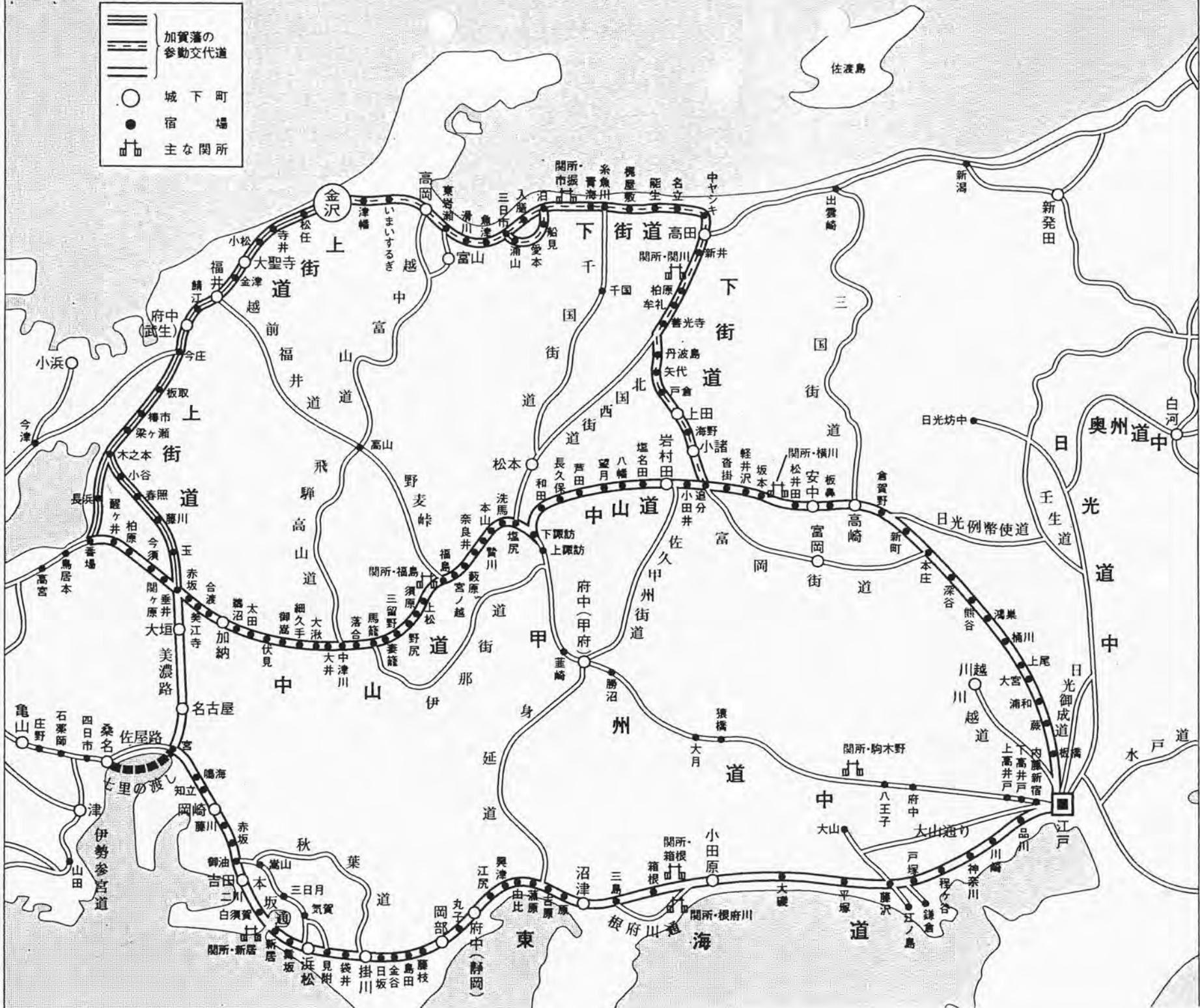
- ① この「色」は「なまけ」の意(新古今・雑・明石 湯色なき人の袖を見よ)。
- ② 供先に立てる「道具(槍)」のことをいう。普通は「二本」対である。ここはその「対之御道具」に加え、そのあとにつづくいわゆる「御中道具」一本を加えているのであろう。(昭一五・二五 川県史・第参編参照)
- ③ 以下「浅い」・「春日」・「大樋」は、それぞれ「心が浅い」・「薄情」・「かすか(幽か)」・「大火」を掛けた掛詞になっている。また「柳」には、当然中国「折柳の故事」に倣い、別離の感がこめられ唄われている。「君が心は」、「すこしなごり」は、「胸は」、「義理と情は」、「それそれ語法的には」、「浅の川」、「春日町」、「大樋」、「柳橋」を引き出す序詞である。
- ④ 以下の道中は、今町・八幡・二日市・太田の順が正しい。唄の調子から、その道順を故意に変えたものであろう。なお、「八幡の八幡」とは、現花園八幡町の「波自加弥(はじかみ)神社」を指す。
- ⑤ 底本では「に」とある。

とくわかに御万歳とや、ありがたかりけるきみが世の、君が心は色をます、その色をます花の頃、北陸道の繁昌や、六十三次宿々の、その宿次を万歳の、言葉に祝ひ奉る。まず一番のおん泊、立つて振り出す御城下の、やれ御通りじやさきのけと、三ぼん道具の数々は、つさせぬ御代の御家中に、君が心は浅の川、すこしなごりは春日町、胸は大樋とおもへ共、義理と情は柳橋、今町・太田・二日市、右に八幡の八幡を、拜して通る津幡宿、五穀成就万民の、ともに御昼の賑しき。しばしねざ、や竹の橋、前坂越えて俱利伽羅の、餅に大小

- ⑥ 「ねざ、(根柢)」に「寝る」を掛け、「しばしねざ、(お不動様)」に「竹の橋」の序詞になる。
- ⑦ 「不動」お不動様」に「不同」を掛け、おそなえ餅に大小さまざまあることをおかしくしている。
- ⑧ 地名の「若瀬」に「言ふ」を掛けている。また、若瀬はその流れの急なことから「なにか若瀬の」は「飛」を引き出す序詞ともなっている。なお、「こもて」であろう。若瀬は、古くからよく知られた蘇の名所である。
- ⑨ 地名の「滑川」に「滑む・遊ぶ」を掛けている。また、「口と髭と」は「滑川」の序詞である。
- ⑩ 「早月」に「早着き」を掛けている。
- ⑪ 「浦山宿」に「深し」を掛けている。
- ⑫ 「一夜」以下「子宝の」まで、「泊」にかかる序詞と見ることができ、「愛本橋」は、当時「日本三奇橋」の一といわれたお橋で、今は鉄橋となりかつての面影はない。「愛本の、橋を渡りて」には、愛の橋を渡る、つまり「ちぎりを結ぶ」の意が掛けられている。したがって「泊」にも、「(子宝か)宿る」の意味を掛けていると見られる。
- ⑬ 地名である。「うた(歌)」・「駒返り(駒返)」に、「馬子唄」・「駒返し」を掛けている。
- ⑭ 「姫川」以下、「姫」・「青海」・「糸魚」には、それぞれ「お姫様」・「逢見」・「厭ひ」を掛けている。
- ⑮ 「あまり」以下「長浜の」まで、「奴六尺」を引き出す序詞である。なお「長浜」の「長」には、当然「長い」を掛けている。
- ⑯ 現地では「ごち」と発音している。
- ⑰ 地名の「中屋敷」に「中屋敷」に江戸時代、上屋敷の控として設けた屋敷」を掛けている。
- ⑱ 「主従」に「罷々(しよじょう)」ここでは、酒で赤くなった者(意)の「意」を掛けている。したがって「主従渡る」はまた、「いづみ橋」を引き出す序である。謡曲「狸々」によれば、高風が狸々に酒をふるまうと、高風の姿に泳めどもつきぬ酒の泉をたえてくれたとある。
- ⑳ 地名「松崎」の「松」に「(客を)待つ」を掛けている。
- ㉑ 地名「関山」の「関」に「急(せき)」、同じ「二俣」の「俣」には「股(また)」を掛けている。以下数行にわたり、極めて好色なものとなっているが、

不動あり、三里の峠うち越えて、殖生の八幡伏拝み、今石動や小矢部川、心にかゝる七瀬川、四里八丁のみちすがら、遙かに見ゆる高岡の、御本陣に着き給ふ。二番の御泊、小杉・下村打越えて、音にきこえし草島の、渡しを越えて喜こんで、なにか岩瀬の飛団子、心にかゝる娘茶屋、われも人もといり給ふ。口と髭とを滑川、早月川を打越えて、魚津の町に御本陣。三番の御泊、四十八瀬の川越えて、日数をつもる三日市、浦山宿と思へ共、一夜は二せと愛本の、橋を渡りて子宝の、泊の宿に御本陣。四番の御泊、国の堺もけふ限り、市振宿を打越えて、うたでなびかす駒返り、われさきに行く立浪の、引くまもまたず親不知、にほんに名高き姫川を、どうぞ青海と思へ共、とかく浮世は糸魚川、五番の御泊、能生権現を伏し拝み、涼しく見ゆる名立山、青木峠に腰をかけ四海の浪もをさまりて、のぼりくだりはありま川、あまり砂路が長浜の、奴六尺よろくと、五智の茶屋へと腰をかけ、おのく休む中屋舗、主従渡るいづみ橋、高田の宿に御本陣。六番の御泊、荒井の宿を打越えて、たんとお客を松崎の、その国元の奥方の、気は関山や二俣の、しぶれるやうに思

-  加賀藩の参勤交代道
-  城下町
-  宿場
-  主な関所



忠田敏男『参勤交代道中記』

加賀藩史料を読む』

(平凡社)

より転載